

石川勇一著『修行の心理学——修験道、アマゾン・ネオ・シャーマニズム、  
そしてダンマへ』 星雲社 (2016)

蛭川 立 明治大学情報コミュニケーション学部\*

Ishikawa, *Psychology of Ascetic Training:  
Syugendo, Amazonian Neo-Shamanism and Buddha Dhamma.*

HIRUKAWA Tatsu



こんな本が読みたかった。できれば三十年前に、である。大学生のころに、こんな本に出会っていたら、さっそく著者と連絡をとり、このガイドブックを手にして南米へと向かっただろう。

この本の核心は、なにより第5章である。著者、石川勇一氏は、アマゾンの密林へと飛び、サント・ダイミ（ブラジルのアヤワスカ茶系新宗教運動）での激的な体験を経た後、初期仏教に出会い、ミャンマーで出家する。とりわけアヤワスカ茶の服用によって、ふだんは見えないことにしている自我の影の部分の否応なく直視させられることになり、悶え苦しむ。これがじつに迫真の描写である。この本が何を言いたいのかを理解したければ、まず第5章から読むほうがいいだろう。

呪術的、多神教的な世界を体験しながらも、その世界に埋没するのではなく、仏教、それも東南アジアの仏教へ「着陸」していく方向性（136～137ページ、5～6章）には著者の慧眼を感じさせる。というのも、東南アジアの初期仏教は、たんに初期仏教が形を変えずに受け継がれているのではなく、近代化のプロセスの中で、宗教とはいえないほどに合理化された思想

と実践の体系へと再構成されてきたものだからである。

この書評を書いている私自身も、同じような体験をしてきた。日本語で自らの内的体験をもとに学術的な議論を掘り下げているのは蛭川立ぐらいしか見当たらない（131ページ）と書いていただいたのは恐縮だが、逆にいえば、この本に書かれている内容は、現在の私にとってはさほど目新しいものではない。といっても、私は先駆者でも何でもない。日本人でアヤワスカ茶の世界を文化人類学的に参与観察したということにかぎれば、中牧弘允、武井秀夫、木村秀雄、箭内匡、山本誠といった人々を列挙することができる。

そもそも、近代社会の人々がサイケデリックス（これらの物質群の呼称のありかたは120ページで詳細に論じられている）によって驚くべき変性意識状態を体験し、あるいは仏教などの東洋思想を参照しながら、やがてトランスパーソナル心理学などの新しい研究分野を形成していったのは、1960年代から1970年代にかけてのことである。私がアマゾン先住民の村に辿り着き、その後タイの山寺の扉を叩いたのは西暦で2000年～2001年のことだったが、すでに「白人」の先客たちでごった返しており、三十年も遅れて、やっとここまで辿り着いたのかという感慨を禁じえなかった。とはいえ、日

\* hirukawa@meiji.ac.jp

本は遅れており、西洋のほうが進んでいるから、それを有り難がって輸入すればいいというものでもない。先駆者というのなら、180～181ページで言及されている加藤清は、西洋での動向と同時期に、しかし独自にサイケデリック精神医学の可能性を開拓した先人であった。

この本のような内容が日本語で読めるようになったのは重要なことだが、非西洋社会でこうした思想が遅れて勃興してきたことについての考察も必要だっただろう。おそらく、サイケデリック体験によって壊されるほどの固い自我の形成と社会の近代化の間には関係がある。アマゾンの先住民たちはアヤワスカ茶を飲みながら、あまり平和的とはいえない呪術戦を続けている。といっても彼らがとくだん邪悪な人たちだというわけでもない。ゴム農園における黒人奴隷解放運動から始まったサント・ダイミやユニオン・ド・ヴェジタル(UDV)は、近代化が進むブラジル社会で中産階級の文化へと変容してきた。こうした社会的背景については補足としてコメントしておきたい。

それでは、遅れてやってきた日本人が、どういう方向を目指すことができるだろうか。まず第一に、仏教というものが身近にあることで、それを西洋人よりも理想化しすぎずに捉えることができる。日本の仏教寺院の現状を知っていればこそ、敢えて東南アジアに向かうことができる。それから、著者のユニークな点は、日本の土着的なアニミズムの流れをくむ修験道のバックグラウンドを持っていることである。このことは、第一章から第三章にかけて詳しく論じられている。

もうひとつ、著者のユニークな背景は、心理臨床の専門的トレーニングを受けており、相応の経験も積んでいるということである。外的な宇宙へと飛び立っていく宇宙飛行士には相応の資質と厳しい訓練が必要とされるが、心的な宇宙へと飛び立つ内宇宙飛行士(psychonaut)も

また同様である。134～137ページには、そのために必要な訓練が列挙されている。サイケデリックな内宇宙飛行士は、しばしば自我肥大などの「事故」を起こしてしまうが、それはサイケデリックスという物質自体が有害なのではなく、服用者の訓練や、施設の整備が足りないのである。181～184ページでは、心理療法家や精神科医の訓練のためにネオ・シャーマニズムを取り入れるという提案も行われている。

同時に著者は、92～93ページで、独自の「修験道療法」という統合的な心理療法の見取り図を提示している。付け加えるならば、こうした心理療法は、メインストリームである生物学的精神医学と対立するわけではない、と私は考える。ブラジルでは合法とされているUDVやサント・ダイミなどの参加者を対象とした精神医学的研究によって、DMT(ジメチルトリプタミン)を有効成分とするアヤワスカ茶がSSRI(選択的セロトニン再取り込み阻害薬)と同様の抗うつ、抗不安作用を持つことが明らかになってきたことについては、123～128ページで紹介されている。セロトニンなどの神経伝達物質とよく似た単純な分子でありながら、自我の死と再生を引き起こすほどの強力な作用をもつサイケデリックスこそが、生物学的精神医学とトランスパーソナル心理療法の架け橋となりうるのではないか。ここに、物質主義的、還元主義的なアプローチと、スピリチュアル、ホリスティックなアプローチの豊かな統合の可能性が開かれているのではないかと思う。

なお、サイケデリック体験などの変性意識体験の意義は、たんに臨床的な応用にとどまるものではない。この本の結論部分では、人間の「成長」の可能性が語られる。たとえば「トランスパーソナル心理学」という言葉には、病的な状態が改善されるというだけでなく、普通の人間がさらに「進化」という、もっとポジ

タイプなニュアンスも、たぶんに含まれている。

私は、物質的なものと霊的なものを対立させる二元論は不毛だと思う。我々を翻弄しているのは物質それ自体というよりは、むしろ貨幣経済のような社会的構築物や、自我という心理的仮構だからである。

外宇宙探査と内宇宙探査は表裏一体である。外宇宙探査でいえば、地球上で生まれて死んでいくだけで何の問題もないのに、なぜ巨大なロケットを作って月や火星にまで行かなければならないのか。なぜ巨大な望遠鏡を作って何万

光年も何億光年も彼方の星々を観測しなければならないのか。少なからぬ宇宙飛行士たちが、宇宙飛行中にある種の神秘的体験を得るという。いったん地球を離れることによって視野が大きく広がり、我々が今ここに生きているという事実を強烈に突きつけられるからではないだろうか。

今後も、内宇宙飛行士という希少なミッションを遂行しつづけている著者からのレポートに、大いに期待したい。